

特集・故鈴木修学先生を偲んで

本学創立と鈴木学長

村松常雄

鈴木学長を俄かに衷いましたことは、本学としてまことに償い得ない損失であり、大きな悲しみであります。本日の追悼会に当り「本学創立と鈴木学長」という題で話しをするように託せられましたので、本学の前身である中部社会事業短期大学が創立されました当時のことを偲び、鈴木先生の建学の精神について簡単に触れたいと思います。

今から恰度十年前、昭和二十七年八月十一日に鈴木先生のお使いとして大須賀氏が来られ、先生が長年に亘る社会事業実践の体験から、是非社会事業の優秀な専門家を教育養成する短期大学を名古屋に創設したいという考えを持たれ、当時社会事業短大は東京と大阪とに一つづつありましたが、これらに對し特長ある立派な学校を創りたいというお考えで、ついでには九月中旬に文部省に申請書類を提出したので、特に教員組織等について骨を折って欲しいという申出でを突然受けたのであります。

名古屋にそのような立派な大学が出来ることは大変結構なことであるが、そういう大きな責任をお引受けして優秀な人材を募るについては、鈴木先生と直接お目にかかつてお考えを充分伺わねばならない。

私としては、第一に大学である以上、専門家の教育、訓練と共に、研究機関として常に新しい研究を進展させる任務を持つ。そしてその進歩、発展する学問を学生の教育に生かし、更にその大学の学問を Academic な雰囲気の下に技術の修得のみならず、学生に真理探求の態度を学ばしめる学問の殿堂でなければならぬ。大学は単なる技術者の養成機関ではない。

特に社会福祉の学問は、新しい総合科学なので、いわば若い社会学、新しい社会科学、更に又新しい心理学、新しい精神医学、等を基盤として、新しく建設され、発展せらるべき学問である為に、寧ろ若い優秀な学者を多く招聘し、充分研究の便宜を図らねばならないと思う。何れにしても、特色のある立派な私立大学を新しく創るには、優秀な先生をお招きして、優秀な学生に充分魅力を持たせ得るものでなければならぬと考える。

こういう点で直接鈴木先生とお話し合つて、私の納得できるものであるならばお引受けしましょうと大須賀さんにお答えしたわけです。その後私が北海道での学会に出張して、八月二十四日の昼頃帰宅したその日に鈴木先生が私の宅においでになり、私は初めて先生にお目にかかったのです。

私は率直に私の考え方を先生にお話ししました。所が先生はこのような私の考え方に、全面的に同意せられ、これについて必要な幾つかの条件についても固くお約束なさいました。そして教員の人選を全く私の方針で行うことを要請されたのであります。

それは全く口約束ではありましたが、私は初対面で先生の人柄に強く打たれ、その言葉を深く信じ得ましたので、このご要請に応える決心をしたのであります。

大学造りは容易ならぬ仕事でありました。又経費の点でも、この種の大学は本来国とか県とかが創設、運営すべき巨額を要する仕事で、わが国では福祉国家などと口では云いながら、未だ国立の福祉大学はないのであります。わが学長はそれを独力で創設し、しかも数年ならずしてそれを四年制大学に昇格させたのであります。これまでの経済的負担はまことに容易ならぬものであつたと察せられますが、学長さんは初志を貫き通して現在に到りました。

学長さんの社会事業の実践、幾つかの社会福祉施設の経営、宗教活動、等々、その功績はまことに偉大であつたことは、今更申すまでもありませんが、本学創立という事業こそ、その中でも最大のものと思ひます。

と申しますのは、大学というものが、決して中絶することの許されない永久性を持つもので、現在迄に本学を卒業して社会福祉の各方面で奉仕活動をつづけている専門家の数が既に七百人に達しています。本大学が永久に存続する限り、学長さんの先覚者としての功績は、将来の卒業生の数の増加と共に、又それらの卒業生の業績と共に、永久に称えらるべきものと思ふからであります。

社会福祉の根本を流れる精神は人類愛だと思えます。この点で宗教と連なるものであり、学長さんの宗教家としての大きな信念と深く連なるものがあることは今更申す迄ありません。

本学創立当初は、学長さんの全学生に対する特別講義もお願いしたのであるが、ご病気になられてからはそれもして頂けず、学生との接触の機会も充分でなくなつたことはまことに残念でした。

本学は今後益々発展のために色々計画が検討されている途上に、俄かに学長を喪つたことは返す返すも痛恨の極みであります。

われわれ後に残されたものは、故学長の精神を護り、その偉大な意図を永久に発展させるように努めることが、故学長の霊を慰める最上の道と信じます。

私も微力ながら本学の創立以来その発展に協力して参りました。今後全職員、全同窓生、全学生が益々一致協力して、学長の建学の精神を昂揚し、これを後から来るものにも伝え、本学の特長を発展させるように努力することを、茲に故学長の霊の前にお誓いすることこそ、本日の追悼会に際して何よりも意義あることと信じます。

終りにご遺族に対し、深くお悔み申し上げますと共に、本日ご臨席頂けましたことをありがたくお礼申し上げます。

(人間関係研究所長)